

興徳寺川施餓鬼法要に参加して

産業開発青年隊同窓会会長 鈴木 浩明

8月16日、産業開発青年隊の松永先輩が住職を務める柚野、興徳寺の川施餓鬼に参加しました。読経のあとの法話で人間万事塞翁が馬「じんかんばんじさいおうがうま」のことを話されました。塞翁は、人の名前ではなく、国境の塞（とりて）付近に住む老父のことで、次のような由来があるそうです。

ある時、老父の飼っていた馬が逃げて、敵地の（胡）に入ってしまった。周りの人々は、気の毒に思い慰めたが、老父は幸いが来ると言いました。すると、数ヶ月して逃げた馬が胡の駿馬を数匹連れて戻ってきました。今度は皆、祝福すると老父は喜ばず、災いをもたらすと答えました。そうすると、老父の息子が落馬して脚に大怪我を負いました。村人は、かわいそうに思い慰めました。

すると、老父は、今度はきっとこれは慶事ですと答えます。その一年後、胡の軍隊が大挙し、侵入して若者が数多く死んでしまいます。しかし、老父の息子は脚の怪我のため戦乱に巻き込まれず生き延びることが出来ました。という話です。

人生は山あり谷ありの繰り返しであり、一つ一つを乗り越えることにより成長することができます。

そして一喜一憂することなく、物事に動じなくなることができるはずです。この動じないという心境は、「勝っておごらず、負けて腐らず。」に通ずるものと言えそうです。

帰りがけ、田んぼの稲穂が頭を下げていました。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな。」

